

# 遷喬まちづくり通信

第32号  
令和6年12月  
遷喬地区  
まちづくり協議会

## お年寄りにやさしい まちづくり部

青谷かみじち史跡公園

瀧本 康子

6月15日(土)のまち中歩き部会では、今年3月にオープンした、鳥取県立「青谷かみじち史跡公園」に17名が、マイカー4台に分乗し現地を訪れた。

そこは、ガイダンス棟と重要文化財棟の2棟が併設されていた。

ガイダンス

棟の館内には、よみがえった「弥生の人」青谷上寺朗さんと青年(発掘当初は女性と思われていた)の



2人が私達を出迎えてくれた。正面には、大木をくり抜いた、丸木船が配置されていた。床面は海と陸を表現した配色がされていたり、壁面には弥生時代の集落(村)での人々の生活の様子が描かれていた。

また、出土した鉄製品のオノや矢じり、加工された石器や木製品、竹カゴや武器等、暮らしのために用いられた生活必需品が展示されていた。

そこで職員の方の説明によると、この土地特有の立地条件が、弥生時代の貴重な遺物を数多く残し「地下の弥生博物館」とまで言われているとのこと。遺構からは百九体の人骨も掘り出された。

人骨の中には刃物や鈍器で殺傷された跡も見られ、戦いによるものと判明した。負傷した頭部に残っていた



「脳」は話題になった。その脳をもとに、DNA分析で復顔された胸像は、全国的に有名になった「青谷上寺朗さん」で

伝(ぎしわじんでん)』に日本列島でも戦乱があった史実が記されている。上寺朗さんも、この戦いの犠牲者のようだ。

二世紀頃には、大陸との交易が頻繁に行なわれ、青谷からは、職人により加工された木製品が高く評価され、「青谷ブランド」は交易の産物として珍重されたようだ。国内でも九州や東北との交流もあったと話された。

その後、重要文化財棟へ。そこには、遺構から発掘された人骨や木製品、土器石器、工芸品、花卉(はなびら)の高杯(たかつき)など、「美」を追求し技術を屈指し製作された品々が展示さ

れていた。まさに「青谷ブランド」を再認識した。また、祈りや物事の吉兆を占った『ト骨(ぼっこつ)』なども見られた。この地下にねむっていた数々の『もの』は、今後、何を語ってくれるのか期待される。

史跡公園の田園の様子は、弥生時代とさほど変わらない風景であろうと想像しながら帰路についた。



動物の骨を用いた占いを骨ト(こつぼく)といい、これに用いられた骨をト骨(ぼっこつ)といいます。

